

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

研究会報告

河内一博 (AA 研共同研究員、防衛大学校)

タイトル:

「アフリカ諸語のイベントの統合のパターンに関する研究」平成24年度第1回研究会

日時:

平成24年5月19日(土曜日)午後1時30分より午後6時

場所:

AA 研301室

[1] 河内一博 (AA 研共同研究員、防衛大学校) 「プロジェクト趣旨説明」

[2] 参加者全員 (報告順に) 「研究会で扱うトピックについて」

稗田乃 (AA 研所員)

阿部優子 (AA 研共同研究員、国際協力機構)

小森淳子 (AA 研共同研究員、大阪大学)

若狭基道 (AA 研共同研究員、明星大学)

梶茂樹 (AA 研共同研究員、京都大学)

塩田勝彦 (AA 研共同研究員、大阪大学)

神谷俊郎 (AA 研共同研究員、近畿大学)

古閑恭子 (AA 研共同研究員、高知大学)

中川裕 (AA 研共同研究員、東京外国語大学)

乾秀行 (AA 研共同研究員、山口大学)

品川大輔 (AA 研共同研究員、香川大学)

米田信子 (AA 研共同研究員、大阪大学)

報告内容:

[1] 河内一博 「プロジェクト趣旨説明」

プロジェクトの背景と目標等について簡単に述べた後、Talmy (1985, 1991, 2000) のイベント統合の類型論の概略を説明し、理論的な問題のいくつかの例を紹介した。

[2] 参加者全員 「研究会で扱うトピックについて」

参加者一人一人が、この研究会で扱いたいと考えているトピック、これまでの研究で発見した問題、今後の展望等について 10~15 分で話し、質疑応答を行った。以下に個々の報告の概要を報告順に示す。(*を付けたものは研究代表者が書いたもので、それ以外のは報告者が書いたものである。)

・稗田乃 (AA 研所員) 「Motion in Acooli」アチョリ語は Talmy が提案する類型論にしたがえば、Satellite-Framed Language とかんがえられる。たとえば、Non-Agentive の Motion を表現する言語形式は、前置詞や副詞である。Manner を動詞で表現する。しかし、例外的な表現を用いることがある。Serial Verb Constructions と Paratactic Constructions である。英語で翻訳すると ACROSS, THROUGH で翻訳できる Motion は、Serial Verb Constructions で表現され、TOWARD で翻訳できる Motion は、Paratactic Constructions で表現される。これらの例外的な表現は、Verb-Framed Language の性格を示している。だからと言って、すぐにアチョリ語は、Satellite-Framed と Verb-Framed の Mixed Language であると結論することは早計である。なぜ

なら、例外的な表現をもちいる **Motion** は、それらが統合された1つのイベントであるか、あるいは複数のイベントの連続であるかが明らかではない。1つの統合されたイベントであるとはなにかの定義が明らかになって解決できる問題であろう。

・阿部優子 (AA 研共同研究員、国際協力機構) 「Motion Verbs in Bende (F12)」西タンザニアで話されるバントゥ語のひとつであるベンデ語 (F12) の移動動詞の代表例と、移動動詞に後続する動詞で特徴的な振る舞いをするものについて、予備的な報告を行った。今後、移動動詞に関わる接尾辞の分析・整理 (S-language的要素の抽出)、および移動動詞と後続する動詞 (複合動詞) の特徴から、ベンデ語の移動動詞の概要を明らかにしたい。

・小森淳子 (AA 研共同研究員、大阪大学) 「イベントの統合パターン」という観点から見て、ヨルバ語の動詞連続の現象をどのように分析できるか、今後の分析方針について議論した。

・*若狭基道 (AA 研共同研究員、明星大学) アムハラ語とウォライタ語のイベントの統合のパターンに関する問題点を副動詞の観点から指摘した。

・*梶茂樹 (AA 研共同研究員、京都大学) ニョロ語のイベントの統合のパターンに関する問題を報告した。

・*塩田勝彦 (AA 研共同研究員、大阪大学) ブラ語とハウサ語のイベントの統合のパターンに関する問題を報告した。

・*神谷俊郎 (AA 研共同研究員、近畿大学) バントゥ諸語のイベントの統合のパターンに関する問題を報告した。

・*古閑恭子 (AA 研共同研究員、高知大学) アカン語のイベントの統合のパターンに関する問題を報告した。

・中川裕 (AA 研共同研究員、東京外国語大学) 「イベントの統合パターンとしてのグイ語の“複合動詞”の事例」コエ語族南西カラハリ・コエ語派ナロ・ガナ語群のグイ語において「マクロ・イベント」がどのような表現にコード化される傾向にあるかを探り、いわゆる「複合動詞」に着目すべきだろうという見通しを述べた。「運動」の表現や「状態変化」の表現の具体例を簡単に示しながら、「V-language」タイプの表現が主流でありそうだという観察を報告した。また、イベントの統合のパターン探求というアプローチが、コエ語族にひろくみられる類似の構文の意味論的分析に新しい視点をもたらす可能性があることを指摘した。

・*乾秀行 (AA 研共同研究員、山口大学) オロモ語とバスケット語のイベントの統合のパターンに関する問題を報告した。

・品川大輔 (AA 研共同研究員、香川大学) 「チャガ諸語における移動動詞のTAMマーカへの文法化」報告者が長く調査を続けているキリマンジャロ・バンツ (チャガ) 諸語のいくつかの言語特徴について、本プロジェクトの趣旨に関連付けながら述べた。とりわけ、移動動詞のTAMマーカへの文法化 (factive motionからfictive motionへ、そしてTAMマーカへ) にみられる言語間の差異に関する現象について紹介した。

・*米田信子 (AA 研共同研究員、大阪大学) ヘレロ語のイベントの統合のパターンに関する問題を報告した。

・河内一博（AA 研共同研究員、防衛大学校）印刷中または準備中の Sidaama 語と Kupsapiny 語のイベントの統合に関する論文の概要を述べた。